

企画展「戦争と大学 ふたたび－軍医と銃後－」と特別講演会を開催

●附属図書館医学部分館

附属図書館医学部分館は、6月10日(金)から9月30日(金)までの間、企画展「戦争と大学 ふたたび－軍医と銃後－」を開催しました。これは、2014年に開催した「戦争と大学」の続編であり、同館4階にある医学部史料室に所蔵する図書、写真、医療器具などを展示公開しました。

1931年の満州事変以降、戦争の拡大とともに軍医として



展示の様子

召集される医師が増えて、医師不足が顕著となり、医師の増員養成が国防上、国民医療上急務とされ、1939年に帝国大学7校などに臨時附属医学専門部が設置されました。

画家藤田嗣治の父嗣章、森林太郎(鷗外)は、陸軍軍医総監となり、『陸軍衛生教程』などの図書を残しています。『光栄録』は1927年愛知県での陸軍特別大演習にともなう昭和天皇による行幸の記録で、本学の前身校である愛知医科大学、第八高等学校なども訪問されています。『写真週報』には、名古屋鶴舞女子機械工補導所の「着物も化粧もそして甘い夢も投げすてて挺身参加するうら若い女性」とあり、窮乏生活から目をそらして、団結を高める記事が掲載されました。軍医の携帯用ヨード丁幾、阿片銃、滅菌ガーゼ包など多彩な資料は、来館者の関心を集めました。

また、9月30日(金)には、大川四郎愛知大学法学部教授を招き「第二次世界大戦中の赤十字と名古屋大学」と題する特別講演会を開催しました。赤十字が視察した俘虜収容所に名古屋帝国大学から寄贈された図書があったこと、抑留所の重症患者が附属病院へ移送されたことなど、本学との関係が明らかにされました。参加者間での質疑応答もあり、参加した市民ら約60名の関心の高さがうかがえました。

ICCAE 第4回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター(ICCAE)は、9月30日(金)、農学部第7講義室において、2016年度第4回オープンセミナーを開催しました。今回のセミナーでは、鴨下顕彦東京大学アジア生物資源環境研究センター准教授が、日本やアジアの人々にとってなじみ深い米作りというテーマに関する最近の新しい動向について「越境する米作



鴨下准教授との討論の様子

りービジネス、生態系、技術と持続可能性」の演題で報告しました。現在、日本国内を含め世界では、「米作りってこんなものだ」という既存の思い込みを覆すような変化が各地で起こっています。鴨下准教授は、米の主食としての重要性について世界的な視点から概説するとともに、日本の農業生産法人などによる認証特別栽培米のような米作りの取り組みや、小麦やとうもろこしと比べて国際取引の少ない米をマーケットに載せられるような新しいビジネスモデルに関する国内外の事例を紹介しました。また、熱帯アジアや南アメリカにおける稲作生態系の変化に対応した稲作技術の開発と農家の適応戦略、水不足に対応した節水栽培技術の研究開発、耐乾性品種の開発などについて自身の調査研究成果に基づく説明がありました。今回のセミナーは、米作りに関する国内外の最新の話について様々な角度から議論し、今後の持続可能な稲作について考えるよい機会となりました。